

日本語・日本語 教育を研究する

第23回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは「言語学習のメカニズムと Focus on Form」です。

言語学習のメカニズムと Focus on Form



上智大学助教授 小柳 かおる

1. Focus on Form とは

第二言語習得 (Second Language Acquisition, 以下 SLA) 研究には、学習者の脳の中で何が起きているのかという言語学習のメカニズムを明らかにしようという研究分野があります。そして、そのメカニズムを活性化する教室指導とは、「学習者が意味のある伝達活動を行う中で必要に応じて言語形式にも注意を向けさせる」ことだと言われるようになりました。これが Focus on Form (FonF) という考え方です。

(1) 教室習得研究の流れ

20 数年前に Krashen が、教室の文法学習は本当の習得にはつながらないと主張したことは、大きな論争になりました。彼の理論を基に考え出されたナチュラル・アプローチは、インプットを多く与え、文法の正確さよりも自然な発話の流暢さを重視した教授法として、特に北米で広まりました。しかし、一方で、SLA では「教室指導は習得につながるか」という研究がなされるようになりました。今では教室指導は、学習のスピードを速めること、高い言語能力を身につけさせることができるという点で、自然習得にはない強みがあることがわかっています。それで、次に「どんな指導のタイプがより効果的か」ということに研究の関心が移りました。そして、指導のタイプを区別するために、FonF という考え方が出てきたのです。

(2) 指導のタイプと SLA

FonF と比べられるのが Focus on Meaning (FonM) と Focus on Forms (FonFS) です。ナチュラル・アプローチやイマージョンに代表される FonM は、意味重視でコミュニカティブに言語が教えられますが、これは流暢さを身につけることはできても、文法の正確さが身につかないとされていま

す。FonFS とは、オーディオリングルや文法訳読法など文法シラバスに基づいたやり方です。

こちらは文法的正確さを重視していますが、このやり方では学習したことが長く残らない、流暢さが身につかないとされています。それで、FonF は流暢さと正確さの両方を同時に伸ばせるやり方として期待されているのです。FonF は FonM のように意味重視ですが、その中で学習者の注意が言語形式にも向くように色々なテクニックを使おうとしています。

2. Focus on Form の方法論

(1) Focus on Form のテクニック

FonF は伝達能力の習得を目指したものですから、学習者が何よりも意味のある伝達活動を行えるような指導方法をデザインする必要があります。その中で言語形式に注意を向けさせるのですが、はっきり注意を向けさせるのではなくて、学習者の言語使用の認知過程のじゃまをしないで自然に行うことが大切です。ですから、意味ある伝達活動を中断して文法説明を始めたり、機械的なドリル練習をすることはタブーだと考えられています。FonF の研究者達は、意味のあるコンテキストを与える方法としてタスク中心の教授法 (Task-Based Language Teaching: TBLT) も提唱しています。

FonF の一つの方法として、インターアクションにおいて伝達上の問題が起きた時にフィードバックを与えることがあげられます。特にリキャストは、学習者の言いたいことはそのままにして間違っただけを直して繰り返す暗示的なフィードバックで、インターアクションの流れを止めない自然なやり方です。

例 学習者：図書館に勉強します。

教師：ああ、図書館で勉強するんですか。
また、文字によるインプットでは、学習者に読ま

せるテキストの中で、注意してほしい文法項目に下線を引いたり、枠で囲んで強調する方法もあります。

例 高校生の時、遠くの学校まで電車で通学していた。

タスクをデザインする時に、ある言語形式を使うことが必須あるいは自然であるようなコンテキストを考えたり、認知的に難しいタスクを考えることも必要です。例えば、あまり知らない土地の地図で道案内をすることは、自分の住んでいる町で道を教えるより認知的に難しいことですが、そのようなタスクの時に学習者は頭を多く使い、言語形式にも注意が向くのではないかと考えられています。

(2) Focus on Form の研究方法

FonF にはいくつかのテクニックが考えられますが、どんな時にそれが有効なのかを実験で調べるのが、FonF の研究です。何かの FonF 指導をして、その効果を事前テストと事後テストのスコアの変化で調べるのです。リキャストが SLA に有効かを調べるためには、インターアクションの中でリキャストをしたグループ、リキャストをせずにインターアクションだけを行ったグループ、何もしなかったコントロール・グループを比較します。もし、リキャストをしたグループのテストのスコアの伸びが大きければ、リキャストは効果があることになります。そのようなことを統計で分析するのです。

また、FonF がいつ、どのようにして SLA に効果をもたらすのかを考えるためには、学習者の頭の中で何が起きているかを考えなくてはなりません。学習者にとって第二言語を使うということは、伝達場面での言語運用ですが、同時に脳の中では言語学習も進行しています。第二言語の能力が低い場合は、自分の注意や記憶などの認知資源を十分使うことができません。そのような学習者の認知的な制約を考える必要があるのです。FonF の有効性を研究する上では、言語学だけでなく認知心理学の知識も必要です。このような研究の目的は、言語習得における学習メカニズムを明らかにすることにあります。学習者がどう学ぶかがわかれば、つまり、どう教えるべきかもわかってくると思うのです。

3. 日本語の Focus on Form 研究の意義

FonF の研究は、北米だけでなくオーストラリアやヨーロッパなどでも行われています。日本語に関する研究は日本国外にはありますが、国内ではまだあまりありません。しかし、日本語教育の関係者の間で SLA 研究の重要性、必要性を説く声はかなり高く、FonF のような研究は、日本語教育にもきつと役に立つ研究だと思っています。日本語教育では記述

的、観察的な SLA 研究が多く、習得のモデルが正しいかどうか実験をして証明していくタイプの理論研究があまり行われてきませんでした。FonF の研究が進めば、日本語教授法の基礎科学の役割を果たす可能性があると思います。

日本語教育で使われている教科書は、以前に比べると言語の機能やコンテキストをよく考えて作られています。その多くは文法シラバスであり FonFS と言えます。ですから、FonF を試してみる必要があると思われます。また、日本語教育では文法から意味重視の FonM に急が変わったことはあまりなくて、FonFS の中でコミュニカティブに教えようとしてきました。しかし、年少者のイマージョン教育なども盛んになってきていて、今後 FonM のような問題が起きる可能性もあります。これからの教授法は科学的に実証されたものであるべきでしょう。

さらに、日本語についての SLA 研究から英語やスペイン語など SLA 理論全体に発信する必要もあるでしょう。一つ考えられるのが、日本語の構文における話者の視点や態度です。挿入句や副詞で話者の視点を表す英語などに比べると、日本語は構文レベルでそれを表現することが多いと考えられています。やりもらいや迷惑受身などはそのいい例です。学習者は文型の中に感謝の気持ち（例 先生は推薦状を書いてくださった。）や迷惑な気持ち（例 きのう夜遅く友だちに來られた。）を込めなくてはなりません。これらの文型は初級で出てきますが、上のレベルになっても自発的な発話ではなかなか使えないとされています。SLA は学習者が意味や機能と言語形式を結びつけるプロセスですが、話者の視点や態度といった機能を文構造に結びつけられるように FonF が必要だと考えられます。

言語学習のメカニズムを調べる教室習得研究が、日本語教育においても盛んになることを願っています。

基本的な参考文献

- Doughty, C. & Williams, J. (1998). Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition. Cambridge University Press.
- 小柳かおる (1998) 米国における第二言語習得研究動向『日本語教育』97, 37-47
- 小柳かおる (2001) 第二言語習得研究における認知の役割『日本語教育』109, 10-19
- 小柳かおる (2002) 展望論文：Focus on Form と日本語習得研究『第二言語としての日本語の習得研究』5, 62-96